

2023年1月1日 礼拝説教要旨

詩編講解説教132「永遠の契約」

詩編132：10～18、ルカ1：67～79

この詩編にはダビデの名前が出てきます。ダビデにまつわる一つの故事がこの詩の背景にありますが、ダビデは神殿を建築することを切望しておりました。ところが実際は彼の息子ソロモンが神殿を作ることになります。その理由はダビデが戦争を繰り返し、多くの血を流したからだとして聖書は記しています。歴代誌上第2章にそのことが記されています。

ダビデは、誰よりも神殿を築く志を持っているにもかかわらず、それを息子に引き継がなければなりません。しかしそれだけに神殿に対する思い、憧れは強いものがありました。困難や逆境が逆にその思いを強めることがあります。巡礼の旅も困難であればあるほど、その目的地への憧れは強くなり、そこにたどり着く喜びもまた大きくなります。礼拝もそうかもしれません。以前も説教で「これが最後だと思って礼拝に来ています」と言われた方の話をしました。いつでも行けると思って礼拝に臨むのと、「これが最後」という思いで礼拝に臨むのでは、その礼拝に対する思い入れは異なるのです。実際コロナや病気で礼拝を休まなければならない状況に置かれている人がいます。その人にとってそれは深刻な問題です。元気な人にはそれがわかりません。これもよく言われることですが、失ってはじめて気づくことがある。平和も健康もそうでしょう。失ってこそ思いを強くするのです。

実は、わたしたちが礼拝に集うことは決して当たり前ではありません。それは単に健康の問題だけではありません。もっと根本的問題があります。礼拝を献げることは、神さまの御前に進み出すことですが、何よりわたしたちはそのふさわしさを失っておりました。それは言うまでもなく罪の問題です。罪ゆえに本当なら神さまの御前に出られない。神さまに顔向けできないわたしたちです。最初の人間アダム以来、人間は罪を犯して御前に出ることができない存在でした。

巡礼者は旅の困難さを自らの罪と重ね合わせていたのではないのでしょうか。険しい山道を歩きながら、御前に出ることを拒むのは、実は自らの罪であること。その苦しい旅路の中で何よりその罪の自覚を彼らは深めていきました。それゆえにたどり着いた喜びは一入なのです。神さまはこの自分を決してお見捨てにされなかった。御前にふさわしくないわたしを迎えてくださった。それゆえ無事エルサレムにたどり着き、礼拝を献げることは何より神さまの憐れみを実感する時でありました。

実は、この132編の背景には、神殿に対するダビデの憧れ、思い入れだけではない。その後のイスラエルの経験があります。王国の分裂以後、イスラエルに安定した時期はほとんどありませんでした。そしてその頂点がやはりバビロニア捕囚です。この132編は捕囚から帰還して神殿を再建する時代に書かれたと言われます。ネヘミヤの時代です。この時代の人々もダビデの心境、礼拝への憧れがよく理解できたでしょう。彼らもまたかけがえのない礼拝の場所を失ったのです。それでも捕囚という困難をくぐり抜けて、国に帰り、さらには神殿を再建して、再び神さまを礼拝することができた。その喜びがどれほど大きいかは容易に想像できると思います。

その困難をくぐり抜け、御前に進み出ることを可能にするものは何でしょうか。「ダビデはあなたの僕、あなたが油注がれたこの人を決してお見捨てになりませんように。主はダビデに誓われました。それはまこと、思い返されることはありません。『あなたのもうけた子らの中から王座を継ぐ者を定める。あなたの子らがわたしの契約とわたしが教える定めを守るなら、彼らの子らも、永遠にあなたの王座につく者となる』」（10～12節）ここには神さまがダビデに約束されたことを思い返されることはないと言われます。神さまが一度結ばれた契約は決して無効にならない、永遠であることが強調されています。この永遠の契約こそ、神さまの豊かな憐れみ、慈しみを示します。「慈しみ」（ヘセド）これも説教の中で何度も触れることですが、神さまの慈しみとは決して変わらない不変の契約のことです。その慈しみゆえに、イスラエルはたとえ神殿を失っても、またそれを再建し、再び礼拝を献げることができました。それゆえ「わたしの慈しみに生きる人は喜びの叫びを高くあげるであろう」（16節）とあります。たとえ失ってもそれを回復される約束、変わらない永遠の契約があるからこそ、わたしたちは希望を失わずに、困難な旅路を進みゆくことができたのです。

そしてこの永遠の契約を揺るぎないものとされたのがイエス・キリストの救いであることは言うまでもありません。今年のクリスマスは各集会でザアカイの話をしました。「人の子は失われたものを捜して救うために来た」（ルカ19：10）とあります。キリストは失われたものを捜し出すためにこの世にお生まれになりました。総じて失うこと、手放すことが多くなる人生です。年老いて、病を得て、最後は自分の命も手放す。何よりわたしたちは罪ゆえに神さまとの関係を手放したのです。しかしどんなに失っても、手放しても、キリストが捜し出して全てを満たし回復してくださる。そのためにキリストはおいでになられ、十字架で死に、三日目によみがえられました。ご自身の命を持って失われたものを満たしてくださった。そのようにして神さまの救いの契約を永遠の契約にしてくださいました。ここにわたしたちの喜び、希望があります。永遠の契約を信じて新しい年を歩み出すことができるのは何という幸いでしょう。